

活動報告書

報告者氏名:佐々木敏幸

所属:東京都立港特別支援学校

記録日:2015年2月26日

【対象生徒の情報】

- 学年 高等部1年
- 障害名 知的障害を伴う自閉症
- 障害特性と困難の内容

「失敗経験」・・・成功体験の少なさとコミュニケーションスキルの乏しさ

「想像力」・・・見通しをもって生活することの困難

「行動障害」・・・否定的な指示や修正に対する拒否反応・要求方法の乏しさや回避行動からくる衝動性

「感覚過敏」・・・聴覚過敏と音声情報の受信の困難(必要な音声情報の取捨選択)

「視覚優位」・・・漢字検定7級レベル程度までの文字による情報理解の高さ

「非柔軟性」・・・強い義務感で行動する性格

【活動目的】

- 当初のねらい

本生徒は、自閉症の障害特性からくる行動(経験)を背景にした生活上の様々な困難を抱え、特別支援学級から本校へ入学してきた。当初のねらいについては、卒業後の就労移行支援の視点を基本に、二つの観点で教育的支援を進めることを考えた。

一つは、社会(集団)生活へ適応し、安定した日常生活を送れるようになることである。教育環境の構造化などを通じて安定した生活がしやすい環境を作り、ストレンクスである文字による情報のやり取りを中心に視覚的な支援を充実させ、見通しをもちやすい生活環境を総合的に構築する。合理的配慮を元にした環境設定を前提に、様々な学習活動を通じて行動の改善を図る。もう一つは、得意な能力を生かし、卒業後の社会生活や就労に向けた基礎的な技能や職業態度及び意識の育成を図ることである。

対象生徒の障害特性や性格など本人の興味関心を元に、見通しをもちながら力を発揮しやすい視覚支援ツールの開発を進める。これらのねらいを元に、教育的支援の充実を図るための一つの領域としてタブレット型情報端末の活用を考え実践に取り組もうと考えた。

- 実施期間

高等部入学の2014年4月中旬から2015年2月中旬までの10ヶ月間(iPhoneの活用は6月中旬からの8ヶ月間)

- 実施者

佐々木敏幸

- 実施者と対象生徒の関係

担任

【活動内容と対象生徒の変化】

● 対象生徒の事前の状況

① 教育活動における行動観察等

② TTAP アセスメント（3尺度6領域／
フォーマルアセスメント）の実施

- ・障害特性の理解やストレングスの確認
- ・アセスメントの評価を踏まえた指導計画の整理

「TTAP」とは

TEACCH の就労に関する移行アセスメント。自閉症スペクトラム障害の障害特性を明確にし、より本人のスキルに合わせた就労支援を展開していくアセスメントツール

アセスメントの評価を基にした指導の観点

- ・言語指示よりも視覚認知に働きかける(伝達)
- ・課題が達成するまで見守る(対応)
- ・環境(視覚・音・空間)の構造化(物理的構造化による再評価)
- ・ICT 機器の活用(学習支援)
- ・事前にルールを示し、できたら褒める経験の積み重ね(正の強化)
- ・問題行動の経験を積ませない(予防としての対応)

「自立」した行動の確立を目標に進める指導計画

- ・視覚的な支援を基に、自分で行動(学習)する
→ 自立した活動時間をつくる(増やす)。
- ・報告カードを用いる(終わったらカードで報告)
→ 「言葉」は見えない。見える具体物で伝達の方向性を視覚化。
「報告」する職業意識の育成。
- ・学習環境の構造化
→ 視覚的に理解しやすい環境。

● 活動の具体的内容

1学期

～ねらい～

「『自立』した学習(活動)時間の確立」

「ワークシステムの導入による、毎朝の『職業』の個別課題への取り組み」

・ワークシステムボード及び指示書(工程表)を活用し、3つの課題の設置、達成、返却、終了報告までの流れを一人で行えるようにする。

・課題学習の主体的な取り組み定着後、色カードから写真カードにシステムを変更する。課題の選択、準備から片付けまでを一人で行えるようにする。職業の時間の行動の全てを自立させる。



「作業学習へ iPhone による工程表(指示書)やタイマー等の視覚支援ツールの活用」

- ・「Time Timer」アプリを活用・・・時間の概念形成が難しい段階のため、残り時間を赤で視覚的に示し、作業時間終了と共にベルが鳴って知らせる。
- ・「たすくステップス」アプリを活用・・・写真と文字と音声(教師)による作業手順の工程表(指示書)を示す。(通気口と階段の手すり拭き・タオルたたみ等)



2学期・3学期

～ねらい～

安定した公共交通機関の利用に向けて(通勤・通学スキル)」

「スクールバス乗車時の見通しをもつため、『バス停乗降者確認 Book』の活用(以下、Book と表記)」

・乗降者する生徒の文字と写真カードの操作により、毎日往復2時間の乗車時の見通しをもつため

・乗降者する生徒をバス停ごとに確認し、毎回カードを付け替える作業をすることにより、乗車中の継続的な活動を保証する(問題行動の代替としての活動提供)



「『LINE』アプリによるバス停通過報告の試み」

- ・Book で通過バス停カードの操作後、母へ「通過したバス停名」を入力して送信する(「渋谷三丁目」・「白金台駅」等)
- ・バス停ごとの送信で、現在の所在確認(一人通学(通勤)時のトラブル対策)



● 対象生徒の事後の変化（「活動の具体的内容」と対応）

<p>1学期</p> <p>成果(達成)</p> <p>・集団生活への適応</p> <p>・安定的、主体的な行動による学習(生活)時間の確立</p>	<p>「ワークシステム導入による、毎朝の『職業』の個別課題への取り組み」</p> <p>・毎朝の「職業」の時間における個別学習の取り組みを自立して進められるようになる。毎日、終了までの平均40分前後を指示なしで達成させる。</p> <p>「作業学習へ iPhone による工程表(指示書)やタイマー等の視覚支援ツールの活用」</p> <p>・「Time Timer」アプリを活用・・・視覚的に終わりを確認できることで見通しをもちながら作業できることが増えた。</p> <p>・「たすくステップス」アプリを活用・・・事前に iPhone で工程を確認してから作業に入る。音声指示を復唱しながら正しい工程で作業を達成させる。間違いの修正や作業終了の報告ができるようになる。指導者への確認行動が減少する。</p>	<p>変化・・・自立した学習時間における問題行動の減少</p> <p>変化・・・自分で見通しをもちながら作業するため時間がかかる。確実な作業の遂行が定着することで指示書(iPhone)がなくても達成できる</p>
<p>2学期・3学期</p> <p>成果(達成)</p> <p>・学校及び家庭での生活の安定により顕在化したスクールバス乗車時の問題行動の改善(減少)</p>	<p>「スクールバス乗車時の見通しのために、『バス停乗降者 Book』の活用」</p> <p>・バス停通過ごとに乗降者を確認し、バス停と生徒写真の入ったカードを通過後のページに貼り替えながら乗車し、自分の降車する最終バス停までの見通しをもてるようになる。</p> <p>・手持無沙汰になると生じやすい問題行動の代替としてカード操作を行う。</p> <p>「『LINE』アプリによるバス停通過報告」</p> <p>・パスワード入力、アプリの選択、誤操作の修正、文字入力、「送信」操作の理解、iPhone の終了等の活用スキルを身につける。</p> <p>・Book のカード操作(本体からマジックテープを剥がす)後に出てくるバス停名を確認し、保護者に通過したバス停名を送信する。</p> <p>・バス停間の手持無沙汰な時間に起こりやすい問題行動の代替として、絵文字の送信などの操作を行う。</p>	<p>変化・・・スクールバス乗車中の見通しをもち、問題行動が減少。</p> <p>変化・・・Book と iPhone の併用による活動時間の拡大。問題行動の減少。</p>



【報告者の気づきとエビデンス】

● 主観的気づき

① 「自立」した時間の確立

特別支援学校高等部入学までの生活全般における様々な困難の中で、自分で判断し行動する機会があまりなかったのではないかと。「自立」した行動の確立によって、問題行動等の方法で表現する必要性が薄れたのではないかと。自分で考え行動することが「できる」ことで、自ら行動を調整できるようになったのではないかと。

② 作業学習における iPhone の活用効果

iPhone で工程表を示すことで自立した作業の遂行が可能になった。しかし、以前に比べて時間がかかる結果になった。よって、それまでの学習状況との変化を確認する必要があるのではないかと。主体的な行動が始まれば、当然作業に取り組む時間がかかるのではないかと。

③ スクールバス乗車時の支援

見通しをもつための支援ツールの導入により、主体的に進める活動ができることで、車内での問題は減少するのではないかと。通学時に効果的な iPhone の活用ができれば、就労に向けた通勤スキルの獲得に繋がるのではないかと。

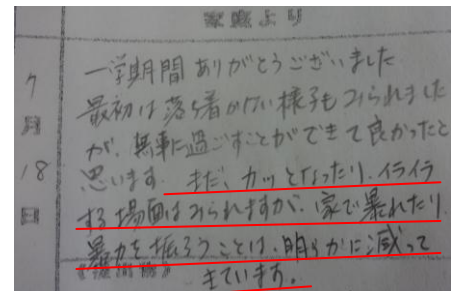
● エビデンス(「主観的気づき」に対応)

① 「自立」した時間の確立

・主に要求や回避のために出ていた衝動的行動に関して、6月から減少し7月からほとんどなくなった。学校と家庭(連絡帳及び面談による)で同じような状況の推移がみられ、学校での「自立」した学習行動の定着と安定に向けた教育的支援の成果がではじめた時期と一致する。

・アセスメントによって、発達特性や能力に応じた支援方法を明確にし、その方法をベースにしてワークシステムの導入や iPhone アプリの活用等を行った。生徒の実態に即した有効な視覚支援ツールとして機能することで、「自立」した学習行動が継続され、その成功体験の積み重ねが、好ましい対人関係の形成や衝動を抑え自らの行動を調整する力へと発展していった。

	家庭での衝動的行動	学校での衝動的行動	ワークシステムによる課題別学習(職業)	作業学習への iPhone の活用
4月	有	週に1~	5月20日	未使用
5月		2回	開始	作業手順等不完全
6月	減少	月に3回	取り組みの自立 平均 25 分	6月第3週使用開始 正確な作業の安定
7月以降	ほとんど無くなる※	ほとんど無くなる※	取り組みの自立 平均 40 分	iPhone 無しでも安定した作業の遂行

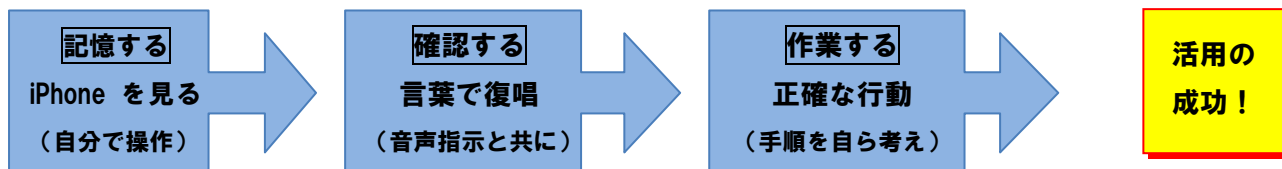


※日常生活でパターン化した衝動的行動を示す。気質としての衝動的な行動は7月以降も若干残る状況(調子が悪い時など)

② 作業学習における iPhone の活用の効果

・「階段の手すり拭き」の作業について、防水及び防護のための保護カバーを取り付けることで安定した活用が可能となった。(水による故障対策・衝撃に対する端末の保護対策)

・iPhone を工程表(指示書)と捉え、従来の絵や文字の工程表と同じ位置付けで活用することで、活用がうまくいくようになった。事前に提示(自ら操作して確認)してから作業に入る。



・日常的な指導が「指示を与える」という教師の行動で成り立たせると、生徒に「指示待ち」の状況を作る結果となる。

・主体的な学習行動が始まることにより、作業への取り組みには時間がかかる結果となった。

・「自立」した行動の大前提は iPhone を自分で操作することであり、教師が操作に関わることは「指示待ち」の行動を強化することに他ならない。iPhone の活用が上手く行き始めた作業での状況の変化は以下のとおりである。

間違いの多かった作業工程	6月までの「手すり拭き」のミス	iPhone 活用後の「手すり拭き」のミス
絞る時の雑巾の持ち手の位置	毎回	毎回 (始めは正確に持てるようになる。しかし、絞り足りず手を逆に戻す。)
手すりに手を置く時の方向	毎回	1 / 5
反対側の手すりへの移動 (指示待ち状態)	1 / 2	1 / 5
作業終了後の適切な報告	1 / 5	0
最後まで自立して作業	毎回	3 / 5

③ スクールバス乗車時の支援

・Book による登下校における最終バス停までのカードの操作により、見通しをもって乗車できるようになった。同時に、カードを運行状況に合わせて操作する活動が生まれ、それまでの手持ち無沙汰の状態から起きていた問題行動の代替の活動となった。これらの支援が、問題行動の減少につながった。(この実践が定着した現在は、Book を「操作して分かる」という取り組み自体の意味は薄れつつあるものの、見通しをもつための儀式化した活動として十分に機能している状態であるため継続している。)



※Bookの実践は、本来は通勤スキルの向上のために公共の路線バス等の利用に関する般化を目標に始めたものである。

一般的な路線バスは、バス停や目的地に関して「次は～です。」とアナウンスが流れるのを聞き、運行表を確認したりしながら情報を得て見通しをもつことができる。しかし、スクールバスは事前に知らせるような運行システムではないため、乗り降りする生徒とバス停を確認することで、現在地を自ら確認できるシステムの導入が必要だという発想に至った。

・Book の活用が定着すると、車内の他の生徒からの大きな音声やトラブル等の環境の影響によって再び問題が生じるようになった。そのため、乗車時の限られた環境で自己完結できるための更なる活動の保証と、卒後の通勤スキル(所在確認、トラブル時の対応等)の獲得ため、LINE アプリと Book を連動させ保護者と連携した活用を進める。

・Book のカード操作後に、通過したバス停を停車ごとに保護者へ文章で送信することができるようになる。(パスワードの入力で iPhone を開く・アプリの起動・タップによる文字入力・送信・アプリを閉じる・誤操作時の修正等)

・現在、安定した活用とその定着に向けて、本人用の iPhone を購入し練習を続けている。

● その他エピソード(画像などを含めて)

タブレット型情報端末との距離感 = 教師の支援の的確さ

「指示書」としての活用について、支援ツールとしての「精度」により生徒の理解や行動は大きく異なるという認識をもつことが大切であると考えます。iPhone の導入初期の失敗では、「たすくステップス」を活用した作業学習における工程表の提示について、作成した指示カードの手順の多さや複雑さ、指示内容の誤り(左右や方向について生徒側か教師側かの視点を混同した写真等)によって、生徒の混乱を招いた状況があった。

これらの失敗を改善し、活用の成功に至る過程で気づいたことは、支援ツールの提示方法を誤ると誤学習を助長するという事実である。生徒の主体的な行動を引き出す大きな可能性をもつツールである一方で、誤った活用方法による危険性に対する認識をもつことが大事ではないかと考えた。また、このことはタブレット型情報端末での支援に限らず、他の支援ツールの活用においても同じことがいえるのではないかと考える機会となった。

教育的支援において、(アセスメントなどの客観的な視点を元に)的確な目標と手だてを設定し、iPhone(視覚支援ツール)との適切な距離感をもちながら活用を進める重要性について、改めて実感することができた。

支援ツール	指示書(工程表)	教師の支援	生徒の行動
・iPhone (たすくステップス)	正しい内容 ・適切な工程と指示	・見守りのみ ・言葉かけが無い場合無音	・課題から課題への移行がスムーズ ・報告まで「自立」して進める主体的行動
・ワークシステム (色および写真)	間違った内容 ・示す工程の数量	・音声言語による指示の多さ ・ミスに対する修正の働きかけ	・頻繁な行動(活動・作業)の停止 ・ミスが多く、その方法のまま行動が定着
・Book	・理解しづらい指示	・一方的な指示	・指示待ち状態

支援ツールの導入によって変化する支援の状況

スクールバスの実践は、Book や iPhone の導入にあたって、支援ツールとして活用しやすい環境を乗務員さんと共に検討した。その過程の中で、実は乗務員さんも自分なりに生徒の対応や支援方法を考えて悩んでいたりと、生徒のために何かしてあげようと考えていたりしていることが分かった。そのため、対象生徒の安定した乗車に向け、座席の変更や支援ツールの配置場所の決定など、運行上の可能な範囲での環境の調整を一緒に考えながら実行できることになった。このようなやり取りを含め、それまでは乗車生徒の状況把握が主体であった添乗員さんの支援(生徒対応)が変化していった。



生徒が安定した乗車状況になることが分かると、積極的に障害特性に応じた生徒対応をしてくださるようになった。

一つの有効な支援ツールの導入によって生徒に良い変化をもたらすことは、周りの様々な支援者の見方や支援のあり方までも変化させる機会となりうるのだと考える出来事であった。